



Title	紫の上の退場 : 女三の宮・明石の君との相対関係をめぐって
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	詞林. 1993, 13, p. 47-62
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67332">https://doi.org/10.18910/67332</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 紫の上の退場

—女三の宮・明石の君との相對關係をめぐって—

胡 秀敏

—

みたい。

女三の宮降嫁事件が起る前、「藤裏葉」巻における紫の上は女性として当代の脚光をあびる存在であった。后がねとして育てた明石の姫君入内につき添って退下の際に、轎車が許される紫の上の栄光が描かれている。

出でたまふ儀式の、いとことによそほしく、御轎車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、……。

(二九八)

と、当時の紫の上は世に敬慕されるような存在であったと言えよう。一方、光源氏は準太上天皇という臣下にしてこの上ない栄光を授かったことになる。このように描かれた「藤裏葉」巻が光源氏世界の大団円であることは、現在の通説的理解となっているが、それは準太上天皇就位という社会的栄耀を意味する以外に、光源氏と「紫上とのめでたき一對を頂点とした六条院の調和ある愛情生活」(3)を象徴するものであった。しかし、作者は決してめでたい世界のままに物語の幕を閉じようとせず、

「藤裏葉」巻が明石の姫君の入内と光源氏の準太上天皇の就位など、めでたい六条院の世界を描いて巻を閉じた。それに続く「若菜上」巻は一転して、病とか、出家とか、密通などの暗いイメージの散りばめられた事件を語る巻である。まず、「朱雀院の帝、ありし御幸ののち、そのころほひより、例ならずなやみわたらせたまふ」(一一一)(一)と語り起こされ、それに次いで、全く新しく登場する女三の宮が紹介されてくることになる。女三の宮は物語の世界に初めて姿が現れるのだが、その登場の仕方は、森一郎氏が指摘されたように「かなり改まったものというべく、さりげない登場というようなものではない」(2)と見られる。女三の宮降嫁の物語については、すでにたくさんさんの好論があり、あらゆる角度からその意義を明らかにしている。ここでは女三の宮の登場によって、作者は紫の上を物語にどう位置付けようとするかという問題に視点を置いて考えて

女三の宮という朱雀院鐘愛の皇女を登場させることによって、めでたい六条院の世界を無残にも打ち壊そうとしたのであるまいか。女三の宮が光源氏に降嫁したことは、つまり、葵の上亡き後、光源氏の正妻の座が長い間空席となっていたことを浮き彫りにすることになり、結局、紫の上が光源氏の正妻ではないことを意味するものだと言えよう。

「野分」巻で寝殿に住んでいたらしい紫の上が、「梅枝」巻では「対の上」と呼ばれて、東の対に居ることはすでに指摘されている(4)。「藤裏葉」巻に紫の上のほえほえしい姿が描かれたにもかかわらず、物語の根本的意味において、彼女は寝殿に住むべき立場の人間ではなく、「対の上」としての立場しか与えられ得ないのである。一度は寝殿に住んだものの、再び東の対に移されるという描かれ方は「東宮妃として入内した姫が明石御方の娘であつて、紫の上は所詮は見せかけだけの母親にすぎないのと、ちょうど見合っている」(5)という大朝雄二氏の指摘は極めて重要だと思われる。事実、「若菜」巻にいたつて、光源氏の地位とそれにふさわしい北の方の不在という問題は表面化され、物語において、初めて光源氏の身分が強調されることで、紫の上の立場の脆さが否応なしに浮き彫りにされたことには間違ひあるまい。準太上天皇となった現在の光源氏の正妻としては、「上の品」である高貴な女性でなければならぬといふことを、改めて認識せざるを得ない。

「若菜」巻において、朱雀院が女三の宮の身の振り方について、側近の女房たちと議論を重ねているのであるが、女三の宮の婿選びは、夕霧が朱雀院の病氣見舞に参上したところから展開されている。夕霧から光源氏へと極めて自然な形で話が進んでいる中で、女三の宮の光源氏への降嫁はいかにも必然的なものであることが印象づけられる。丹念な叙述であらゆる角度からその必然性を強調する作者の意図は何であらうか。まず朱雀院が乳母たちに向かつて、女三の宮の婿の条件について次のように語る。

姫君のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、「見（深見）はやしたてまつり、かつはまだ片生ひならむことをば、見隠し教へきこえつべからむ人の、うしろやすからむにあづけきこえばや」など聞こえたまふ。おとなしき御乳母ども召し出でて、御（深見）裳着のほどのことなどのたまはするついでに、「六条の大（深見）殿の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな。ただ人のなかにはありがたし。内裏には中宮さぶらひたまふ、次々の女御たちとても、いとやむことなき限りものせらるるに、はかばかしき後見なく、さやうのまじらひいとかなかなからむ。この権中納

言の朝臣のひとりありつるほどに、うちかすめてこそころみるべかりけれ。若けれど、いとみやうぎくに、生ひ先たのもしげなる人にこそあめるを」とのたまはず。(若菜 上二〇—二一)

女三の宮の処遇についての朱雀院の思ひは、右の引用に集約されているように思われる。この朱雀院の言葉の中に、①かつて光源氏が若紫を引き取って養育していたように、女三の宮を受人れるのを願っていること、②鐘愛の内親王故に「ただ人」は婿の対象として考慮に入れないこと、③今上帝の後宮への入内は、中宮や女御たちの中に交じって気苦労をするから、無理であると判断していること、④夕霧には雲井雁がいるから、婿に迎えるのは諦めていること、などが含まれている。朱雀院の言葉で明らかのように、女三の宮の婿選びは、その始まりの時点から、婿として選ばれ得る光源氏の周辺人物を取り除くべく、極めて作爲的な叙述がなされている。

女三の宮は「若く何心なき御ありさま」であり、その様子はさらに乳母によって「あさましくおぼつかなく、心もとなくのみ見えさせたまふ」(若菜上二五)とも見られている。このよくな若くて何も分らない姫宮だからこそ朱雀院は心配でならなかったのである。「見はやしたてまつり、かつはまだ片生ひならむことをば、見隠し教へきこえつべからむ人の、うしろやすからむにあつけきこえばや」と考へるのは皇女であるからこそその思い入れであろう。そして、こうした女三の宮の将来の可能

性として、ここで意識されてくるのが「六条の大殿」が養育した「式部卿の親王の女」であることに注意を払いたい。もとより朱雀院は女三の宮が未熟であることを知って、光源氏が幼い紫の上を引き取り、やがて六条院の女主人となり得るまでに養育したように、女三の宮を迎えて世話してくれる人がいないかと思案したのである。

この朱雀院の女三の宮の婿選びの四つの条件に対する乳母の反応は、次の通りである。

「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、ほかさまに思ひうつるふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐかたはべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしくおぼしたる心は絶えずものせさせたまふなれ。

そのなかにも、やむことなき御願ひ深くて、前齋院などを、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」(二二)

と述べ、乳母は夕霧が「まめ人」であって、年ごろ雲井雁に心を寄せて他には決して心を移さなかったのだから、婿としては可能性がないと解説し、それに対して光源氏は「人をゆかしく」思う心が昔のままであるという。そして前齋院を事例として、光源氏が身分のある女性を望む心が深いと評している。これを聞いて朱雀院は「いで、その旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」(二二)とは心配するものの、光源氏に愛される多くの女性たちの中に交じって気苦労はあっても、結局女三の

宮を親代りとして託しておこうという心境になっていく。

女三の宮の婿選びは、このような朱雀院が左中弁や、女房たちの提案をまとめた上で決めたものである。その中でとくにこの婿選びに重要な役割を果たした乳母の兄である左中弁は、内親王の降嫁について、紫の上の存在に少々危惧しつつも、光源氏がつねに漏らしていた言葉として、

さるは、この世の栄え末の世に過ぎて、身に心もとなきとはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある、(二四)

と伝える。そしてこの光源氏の不満を、左中弁は、

げにおのれらが見たてまつるにも、さなむおはします。かたがたにつけて御蔭に隠したまへる人、皆その人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやおはすめる。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ(二四)

と、高貴な妻のいないことに対する光源氏の不服だと判断する。「わが心にも飽かぬこと」とは、左中弁の理解によれば、光源氏には肩を並べられる正夫人がいないということであり、もし女三の宮降嫁が実現すれば、「いかにたぐひたる御あはひならむ」と言っている。一見したところ、これは左中弁という一介の召人の見解にすぎないが、しかし、敢えて召人ならでの意見を告げさせるところに、作者の見解や意図が含まれているこ

ともも理解できよう。光源氏が現世の栄華に不足はないが、不満に思うこともあり、栄華をきわめた準太上天皇光源氏の正妻として、花散里や明石の君はもろんのこと、紫の上さえも「限りあるただ人ども」で不釣合であり、女三の宮こそ、準太上天皇という身分に並び得ると解するのである。物語も光源氏にふさわしい身分の正妻がいなことを「若菜上」巻の前半で何度も語っているように、光源氏の栄光をさらに飾るためにも準太上天皇の正妻として女三の宮の降嫁が必然的になってくるように思われる。

さらにこの光源氏の述懐しているところを、『岷江入楚』所引の三条西実隆の秘説は、

源の自称也我身の上に不足なる事はなきを本台のしかく／＼となきのみ不足なると也紫上も人からはよけれともしきく／＼にむかへ給へる本妻にはあらず(6)

と、光源氏の「飽かぬ」心中の所以を説明している。

紫の上は皇孫の出自でありながら、正妻の子でないという点において、皇女である女三の宮に比べてその身分が一段と劣ることは明らかである。従って長い間光源氏の寵愛を受けているにもかかわらず、女三の宮の高貴さに圧倒され、紫の上は準太上天皇となった光源氏の配偶者として世間では認められがたいのである。「藤裏葉」巻でさりげなく描かれている準太上天皇就位の記事は、実は「桐壺」巻の高麗の相人の予言通りの結果であり、そしてこれは物語第二部の方向づけにもなっているこ

とと見られよう。つまり、準太上天皇となった光源氏には、身分相応の高貴な女性がどうしても必要になつてくることが表面化されることになる。いくらこれまでに、光源氏と紫の上はめでたい限りの結びつきであつたにしても、準太上天皇の正夫人として、紫の上は身分という点で女三の宮の比ではない。まことに身分上申し分ない一對として、光源氏と女三の宮の結びつきが望まれてくることは、もはや必然的な成り行きと見られるのであらう。

### 三

物語の世界に描かれたこれまでの光源氏は、身分が高貴であるだけのために、女性を尊び、愛することが全くなかつた。いとしく思う女性のみを愛するという光源氏の一貫したあり方から言えば、たとえ朱雀院のたつての願ひだからといつて断りにくいにしても、正妻として、幼稚な女三の宮を迎えることは明らかに異例である。光源氏は、「若菜上」巻で、左中井から朱雀院の伝言を聞いたとき、どのような姿勢を示したのか、まず次の言葉から考えていきたい。

この宮の御こと、かくおぼしわづらふさまは、さきさきも皆聞きおきたまへれば、「心苦しきことにもあなるかな。さはありとも、院の御世の残りすくなしとて、ここにはま

た、いくばく立ちおくれたてまつるべしとてか、その御後見のことをば受けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、今しばしのほども残りとまる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの皇女たちをも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかく取り分きて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなきなりや」とのたまひて、「ましてひとへに頼まれたてまつるべき筋にむつび馴れきこえむことは、いとなかなかに、うち続き世を去らむきざみ心苦しく、みづからのためにも浅からぬほだしになむあるべき。(若菜上三二―三三)

女三の宮降嫁に関して、光源氏は、自分の年齢が朱雀院とさして変わらないし、また死別してのちの極楽往生の妨げとならうということ、女三の宮を引き受けるのに消極的な態度をまず示している。しかし朱雀院は光源氏のことを「まことに、かれはいとさま異なりし人ぞかし。今はまたその世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加はりにたる」(若菜上一九)と誉め讃えている。そのことから思えば、「朱雀院が源氏に対して女三宮の降嫁を決定したのは、彼の美質に対する心からの傾倒であつた」(7)という森岡常夫氏の指摘は正しいと言える。従つて光源氏の年齢という言いわけは、まず通用しないことは明らかであらう。

このように、光源氏は表面では、あくまでも院からの依頼を

強調している。彼は、女三の宮降嫁を、自らの意志によるものではなく、あくまでも院からの懇請によって引き受けるという姿勢を取る。そして、

中納言などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき生ひ先なめれば、さもおぼし寄らむに、などかこよなからむ。されど、いといたくまめだちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせたまふにやあらむ(三三)

と、光源氏は、老いた自分は不適當であるが、夕霧は将来性、人柄からみてもふさわしいと言う。それは朱雀院がすでに夕霧を断念したことを承知の上で、敢えて言っていることであり、しかも夕霧には「意中の人を妻にしましたようだ」と強調しているのだから、この夕霧推薦の仕方は「あまり積極的でない」(8)と玉上琢弥氏が言われる通りである。また、夕霧に雲井雁がいると言っていることは、つまり北の方のいる身分では、新たに女三の宮を受け入れることが不可能であると言うが、それでは光源氏自身に紫の上がいることはどう理解すべきか。一方、朱雀院が夕霧を婿として諦めたのも、夕霧の北の方として雲井雁の存在を考慮したのである。そうすると、紫の上の存在を知りながら、光源氏に女三の宮降嫁を決めたのは、紫の上の立場を無視したことになる。そのような意味では、朱雀院側も光源氏側も、雲井雁の存在を理由に夕霧が女三の宮の婿としてふさわしくないと、夕霧に対しての雲井雁と光

源氏に対しての紫の上の存在意義が全く違うものであることを物語っているのだと言えよう。このように表面上は光源氏はあくまでも消極的な受け身の立場にあったが、実際には女三の宮降嫁に対する光源氏の積極性も潜んでいることは否定しがたい。女三の宮の処遇は、いろいろと検討の後結局、院は女三の宮を光源氏に託すことにした。東宮も院の決意を妥当な帰結として、「かの六条の院にこそ、親さまにゆづりきこえさせたまはめ」(若菜上三三)と賛意を表した。東宮の、女三の宮を光源氏に「親さまにゆづり…」という考え方は、院の「この宮をあづかりてはぐくまむ人」という思惟と趣旨を同じくしていると考えるであろう。

光源氏が女三の宮降嫁を受諾した理由は、すでに多くの先学が指摘しているように、新たな藤壺のゆかりを求めためであり、朱雀院への同情、あるいは光源氏の色好みの現われなどである。これらの指摘はまことに傾聴すべきものであるが、女三の宮降嫁において、朱雀院と光源氏との間には「親さまに」という点で生じた微妙な食い違いが、かえって光源氏の望みを叶えるのに有利になっていることも見逃せない。すなわち、「親さまに」という朱雀院の願いが高貴な妻のいない光源氏の不満を満たすことに利用されたのであり、その意味では、「藤裏葉」巻で準太上天皇となって、より完璧な栄光を目指すことが、光源氏を女三の宮との結婚へと運ぶことになったのだと言うべきであろう。従って、降嫁を受諾する光源氏の意識は、たんに藤

壺への思慕や、朱雀院への同情だけではなく、今を時めく準太上天皇にふさわしい身分の姫君をほしがっていたからこそ、朱雀院と東宮の意向を都合のいいように受け取って、たとえ表面では消極的な姿勢を見せていても、皇女である女三の宮降嫁を快く引き受けたと理解しても差し支えないであらう。

#### 四

「若菜上・下」巻においては、女三の宮事件がもっとも印象的であることは、周知の事実であるが、しかしそれが明石一族にかかわる巻としても重要な意義を有することを見逃してはならない。女三の宮降嫁によって、六条院は紫の上の苦悩を焦点として全面的に変容されていくことになるが、六条院における紫の上の位置の不安定さを彼女自身に痛感させるのが、女三の宮降嫁事件であると共に、姫君の成長に伴う明石の君の存在の確かさでもあった。

紫の上は、朱雀院の内親王という高貴な女三の宮に対して、決して競う心を持たないというわけではない。しかし客観的に見て女三の宮は身分が上であり、紫の上はその降嫁によって苦しむが、競争心を自ら抑制せざるを得ない立場の人間である。そして、森一郎氏の言われる通り(9)、女三の宮が降嫁したことは、紫の上に「大きな衝撃を与えたものの」、それはあくま

でも彼女の「独演的な内面劇」なのであって、緊張関係は表面に現れるものではない。それに対して、むしろ明石の君の存在がより紫の上の神経を苛立たせたようである。たとえば、

宮よりも、明石の君のはづかしげにてまじらむをおぼせば、  
御髪すましひきつころひておはする、たぐひあらじと見え  
たまへり。(若菜上七七)

と、女三の宮に対面したいことを申し出た時の紫の上について書かれている。紫の上にとって、幼少な女三の宮よりも、こちらが気がひけるような素晴しい様子で明石の女御のそばに控えているであろう明石の君を意識していることは明らかである。

「若菜上」巻では、明石の女御は懐妊のため、六条院に退出するにあたって、

姫宮のおはします御殿の東面に、御方はしつらひたり。明  
石の御方、今は御身に添ひて出で入りたまふも、あらまほ  
しき御宿世なりかし。(七七)

と明石の君の素晴らしい運勢は世人に羨ましがられる。やがて、明石の女御が待望の皇子を出産する。次代の六条院権力の支えとなるべき、第一皇子出産という事態にあたって、紫の上と明石の君がそれぞれどのような立場にあったのか。出産の時日が迫ってから、

陰陽師どもも、所をかへてつつしみたまふべく申しければ、  
ほかのさし離れたらむはおほつかなしとて、かの明石の御  
町の中の対にわたしたてまつりたまふ。こなたはただおほ

きなる対二つ、廊どもなむめぐりてありけるに、御修法の増隙なく塗りて、いみじき験者どもつどひてのしる。母君、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなれば、いみじき心を尽くしたまふ。(九二―九三)

とあって、陰陽師にこのように言われたので、姫君の出産場所はどこかに移らねばならないことになる。そこで、実母明石の君のところを選ぶのは、あらゆる意味において自然のように思われるが、しかし注目したいのは、なぜ紫の上と一緒に同行かなかったのかということである。「紫式部日記」には、中宮彰子の皇子出産にあたって、

人げおほくこみては、いとど御こちも苦しうおはしますらむとて、南、東おもてに出ださせたまうて、さるべきかぎり、この二間のもとにはさぶらふ。殿の上、讃岐の宰相の君、内蔵の命婦、御几帳のうちに、仁和寺の僧都の君、三井寺の内供の君も召し入れたり。(10)

とある。「殿の上」はもちろん道長の妻倫子であり、母親が産婦のそばにいて当然のことなのである。しかし、すでに後藤祥子氏が言われる通り(11)、紫の上が明石の女御のところを渡るのは「皇子誕生のあと」になり、「生死を賭けた運命の瞬間」に、不安と期待を抱いたまま明石の女御を見守ったのは、やはり実母の明石の君であり、紫の上はその祝いをするために、「足を踏み入れたことのない明石の領域に入ってゆくことになら」のであった。さらに「六日といふに、例の御殿にわたりた

まひぬ。七日の夜、内裏よりも御産養のことあり」(若菜上九八)と、描かれているように、三日、五日の産養は明石の君のところを済ましてから、ようやく女御が南の殿へ帰ったことになる。この産養の儀式も「源氏の経営というより、女あるじ明石の経済力や手腕が物を言っているはずだ」(12)という後藤祥子氏の指摘に傾聴すべきである。もし紫の上が明石の女御の実母であつたら、第一皇子出産という六条院次代の栄華にかかわるような重要な場面に、彼女は主な保護者の一人として、明石女御のそばに在るであろうし、勿論皇子誕生の盛大な祝いも明石の君の冬の町ではなく、紫の上の南の殿で行われるはずであつたらう。そうしないことによって、明石の君の、以後の六条院内部における地位の確実性が浮き彫りにされてくることになる。

ここで、「野分」巻で、野分の見舞いに巡回する光源氏がすぎなく通りすぎる態度に対する苦しみを、さりげなく独詠歌に言いこめる明石の君を思い起こす。中宮を見舞って後、光源氏は明石の君のところへ赴く。

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕へどもぞ、草の中にまじりてありく。童女など、をかしく相姿うちとけて、心とどめ取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。もののあはれにおぼえけるままに、

筆の琴を掻きまさぐりつつ、端近うゐたまへるに、御前駆追ふ声のしければ、うちとけなえはる姿に、小桂ひきおとして、けちめ見せたる、いといたし。端のかたについるたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りましたまふ、心やましげなり。

おほかたに萩の葉過ぐる風の音も憂き身ひとつにしむ  
こころしめて

とひとりごちけり。(野分一三五—一三六)

ここで語られている明石の君への処遇は、当時の六条院における彼女の客観的な比重からすれば、むしろ当然だとも言えよう。この処遇に対する明石の君自身も、独詠歌のように徹底した「身のほど」意識によって、自らを微小の存在として封じこめねばならぬ現実の苛酷さに堪えているのである。

ところが、明石の姫君の成長に伴い、明石の君の立場も変わってくる。姫君の入内、出産、今上帝即位と続く明石の姫君の栄華への道程は、その生母である明石の君の存在を、確実に高めていくことに密接に繋がっているのである。皇子出産の場合を見るとそのことが一層わかってくる。

白き御装束したまひて、人の親めきて、若宮をつと抱きてゐたまへるさま、いとをかし。みづからかかること知りたまはず、人の上にも見ならひたまはねば、いとめづらかにうつつしと思ひきこえたまへり。むつかしげにおはするほどを、絶えず抱きとりたまへば、まことの祖母君は、た

だまかせたてまつりて、御湯殿のあつかひなどをつかうまつりたまふ。春宮の旨言なる典侍ぞつかうまつる。御迎湯におりたちたまへるもいとあはれに、うちうちのこともほの知りたるに、すこしかたばならば、いとほしからましを、あさましく気高く、げにかかる契りことにものしたまひける人かな、と見きこゆ。(若菜上九八)

若宮を抱くのは「人の親め」く紫の上であつたが、明石の君はここでも自ら卑下して、産湯の介添役を勤める。物語には今まで彼女の卑下した姿勢が一貫して書かれていたが、しかし、この場合では、皇子誕生という六条院次代の栄華にかかわる重大な事象の中で、明石の君の行為は、「彼女の謙遜の美德を語るものでこそあれ、境遇の厳しさを語るものとなっていない」(18)という熊谷義隆氏の指摘はかなり示唆的である。同じ一歩退いた態度を取るにしても、明石の女御に男御子が生れてから明石の君の一貫して卑下した姿勢のもつ意味は明らかに変わってきたと言えよう。同じ「若菜上」巻で、明石の君は、女三の宮降嫁後の、六条院における光源氏、紫の上、女三の宮の相互関係を見るにつけ自己の運勢は大したものだと思ふ。そして、

「さもいとやむことなき御心ざしのみまさるめるかな。げにはた、人より異に、かくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはへの御かしづきのみめでたくて、わたりたまふこともえなのめならざめるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋

にはおはすれど、今一際は心苦しく」としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世は、いとたけくぞおほえたまひける。やむごとなきだに、おぼすさまにもあらざる世に、まして立ちまじるべきおほえにしあらねば、すべて今はうらめしき節もなし。(一一九—一二〇)

と自らも思った。この「わが宿世は、いとたけくぞ」という思ひは、

二条の院とて造り磨き、六条の院の春の御殿とて、世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけり、と見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。(匂兵部卿一六四)

と書かれた明石の君の将来の安泰に結び付くものである。さらに、紫の上が光源氏と情愛関係のみで繋がる限り、彼の寵愛ぶりに左右されなければならぬのに対して、明石の君は、やがては帝になる孫がいるから、光源氏にだけすがらねばならぬ必要もない強い運勢をもっている。「わが宿世は、いとたけくぞ」や「すべて今はうらめしき節もなし」という明石の君の心中の思ひは、意識としては、すでに紫の上に遠慮すべき立場を超えている。この彼女の意識に則してみる限り、光源氏の意図する六条院の人間関係の秩序には、ある種の動揺が兆してくるように思えるのである。

このように、女三の宮の身分に圧倒される紫の上の、一方に対峙するのは、皇子出産によりいよいよ地位の上昇が確定されてくる明石の君であることは否定しがたい。明石の女御が若宮を出産する折、春宮の宣旨なる典侍は「あさましく気高く、げにかかる契りことにもしたまひける人かな」と明石の君を礼讃した。一方紫の上も、明石の君の存在が「めざまし」と思うものの、さすがに彼女の運勢のすばらしさを認めざるを得ない。

御方の御心おきての、らうらうじく気高く、おほどかなるもの、さるべきかたには卑下して、憎らかにもうければらぬなどを、ほめぬ人なし。対の上は、まほならねど見えかはしたまひて、さばかりゆるしなくおぼしたりしかど、今は宮の御徳に、いとむつましくやむごとなくおぼしなりなり。(若菜上一〇〇)

ここでは、明石の女御に若宮が誕生したことで、紫の上の意識において明石の君を親しく思うと同時に「やむごとなく」思うようになったことに注目したい。光源氏と出会った当初の明石の君は、一介の受領階級の娘でしからずなかつた出自から言えば、皇孫である紫の上に比べてその立場がはるかに劣るものだったのである。しかし明石の姫君の成長によって、明石の君の受領の娘である故の境遇の厳しさは、明らかに緩和されてくるように思える。その意味では、紫の上に遠慮して、常に卑下し

た態度を強いられる明石の君の立場も、彼女の人生のある時期、つまり皇子誕生以前までに限定されなければならない。光源氏の愛を一身に集めている紫の上といえども、将来帝となるはずの皇子の祖母君と思つて、明石の君の宿世、宿運を強く意識させられ、六条院における紫の上と明石の君の客観的立場が逆転してきたようにさえ見られるのである。

たしかに光源氏から受ける表面上の待遇から言えば、明石の君と紫の上の間には格別の差が見られる。明石の君もつねにわが身の程を自覚し、姫君の養育を紫の上に委ねざるを得ない自己の運命を見つめて、決して紫の上に対抗するような行動は取らない。しかしやがて姫君が成人し、入内して女御となる。さらに生まれてくる一の宮が立坊し、即位する榮進に伴つて地位の上昇が約束されるのは、実の祖母明石の君であるに違いない。そのような意味から考えると、姫君を紫の上引き渡すように判断した光源氏の目的は、二人の位置をこのような形で上下の決着をつけるためというよりも、いかにして紫の上と明石の君を容認させるかということとにあり、と見えよう。光源氏にとって重要なのは、二人の対立を和解させることではなく、姫君の前途と、それに伴う自己の榮華がいかに確実に保障されることであろう。

次々と生まれる皇子たちによつて、紫の上は一体どのような存在であり得たのであろうか。倉田実氏が言われる通り(14)、「明石の姫君の養育という点については、紫の上は明石の一族

にとつて必要な人物であつた。しかし、東宮が帝位に就くことをもくろむ現在となつては、紫の上はもはや必要のない人間」となつてしまつた。住吉参詣に明石一族の繁榮が語られた頃、女三の宮は二品に昇進し、朱雀院や、今上帝への憚りとはいへ、「わたりたまふこと、やうやうひとしきやうになりゆく」(若菜下一六一)光源氏を見ていると、紫の上は不安と出家への願望がつのるばかりである。

かく年月に添へて、かたがたにまさりたまふ御おほえに、わが身はただ「所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがな……。 (若菜下一六一—一六二)

という紫の上の不安は光源氏の愛情のみに支えられる存在基盤の危うさに由来するものである。そしてその不安は森一郎氏が指摘されるように(15)、「誰よりも明石の御方との対比をするどきわだたせる」ものであつた。言いかえれば、紫の上の寂寥が、女三の宮の二品昇進と「わたりたまふこと、やうやうひとしきやうになりゆく」状況に直接かわるのであるが、いづれ明石の女御の皇子は東宮となり、「この東宮が即位の暁には、祖母として叙位を受けることになるのは紫の上ではなく明石の御方」(16)であることを自覚した寂しさが紫の上の胸にひびくのであろう。「藤裏葉」巻で、紫の上は明石の姫君を養女として「御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異なら

ぬ」(二九八)地位を得るに至ったが、実の子でないことは決定的な負目となった。

限りもなくかきつきすゑたてまつりたまひて、上は、まことにあはれにうつくしと思ひきこえたまふにつけても、人にゆづるまじう、まことにかかることもあらましかばとおぼす。大臣も、宰相の君も、ただこのことひとつをなむ、

飽かぬことかなとおぼしける。(藤裏葉二九七)

とあって、紫の上が明石の女御に付き添って入内する栄光の頂点にあつてなお、紫の上の実子が女御として入内することが反実仮想されている。「若菜」巻に至って、明石の女御が立后し、一の宮が立坊するという「一つながりの榮進を、紫の上は我が娘我が孫の榮耀として受けとめることができず、明石方の栄光として傍観する他なかった」(17)のである。

このように、女三の宮は準太上天皇の正妻として、二品の内親王となつて格式を高め、明石の君は皇太子のまことの祖母君として、六条院の榮華に寄与しているのに対し、紫の上は自分だけが中途半端に取り残されているような状態であることをわびしく思つて、いよいよ出家を願う。紫の上は光源氏に深く愛されていても、世間から認められない人である以上、六条院における女主人の座を女三の宮に譲らなければならない。一方、姫君の養育権を勝ち取ったものの、それはあくまでも養母としての立場しか得られないのである。結果として、「紫の上自身は明石一門の繁榮とは結局無縁であつて、世話役として終始し

ただけで何も得るものはなかった」(18)という小町谷照彦氏の指摘は正しいと言える。女三の宮降嫁による苦惱と、次第に重みを増してくる明石の君のはざまにあつて、紫の上は自らの宿世を見つめていく。かつて紫の上に遠慮しなければならぬ立場にあつた明石の君は、姫君の榮華にともなつて、六条院内部における彼女の位相の大きな改変が見られるようになった。それに代つて今度は紫の上が女三の宮に遠慮し、妻の座をあげ渡さなければならぬ立場に追いやられる。六条院における明石の君の地位の上昇に対して、紫の上の占める位置は従来の重みを失いつつあると認めざるを得ない。

## 六

紫の上の妻の座は絶えず脅かされ続けていた。なぜなら物語の世界において、彼女は光源氏の愛情以外に何の存在基盤も持たないからである。強引に二条院へ引き取られたこと自体が「物語の織りなす世界での紫の上の地位をおのずから明示」(19)されることになる。だからこそ、女五の宮という人物は、紫の上の存在を無視して、次のような発言をする。

この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、今はじめたる御心ざしにもあらず、故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、

「思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしこと」などのたまひ出でつつ、悔しげにこそおぼしたりしをりをりありしか。されど、故大殿の姫君ものせられし限りは、三の宮の思ひたまはむことのいとほしさに、とかく言添へきこゆることもなかりしなり。今は、そのやむごとくなくえさらぬ筋にてもせられし人さへ亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましもあしかるまじ（少女二一八—二一九）

この発言は、どこまで重さがかかるのかは判断しにくいが、光源氏との結婚を朝顔の姫君に極力勧める言葉の中には、紫の上の存在は全く問題にされていない。そして女五の宮の言葉の中に父故式部卿の宮も光源氏との結婚に賛成だったことをもらしているのだから、この発言は彼女の個人的なものとは片づけられず、「この関係における客観的状況をつかんだ一つの意見」(20)として見るべきであろう。

ところが、幸運にも朝顔の姫君の拒絶で、光源氏との結婚話を実現されないまま終わってしまう。しばらくの間は、紫の上は唯一正妻に準ずる立場の存在として、光源氏のそばに身を置くことができた。このような「若菜」巻以前の紫の上の立場については、「玉鬘」巻で右近が玉鬘の乳母に語る話の中で「殿の上」と呼んでおり、六条院春の殿に光源氏とともに住んでいることから、地の文では「春の上」「南の上」「殿の上」と呼ばれ、さらに「真木柱」巻では鬚黒大将とその北の方から「大

殿の北の方」と呼ばれ、正妻扱いを受けられているようである。ところが、「野分」巻で紫の上が夕霧によって犯される可能性が十分あることを仄めかしながらも、敢えて実行に至らせなかったのは、紫の上の造型における作者の意図的設定であったように思われる。つまり、「野分」巻で寝殿に住んでいたらしい紫の上が、「梅枝」巻に至ると「対の上」と呼ばれ、東の対に移されたことは、やはり彼女が「夕霧に犯される主役をおりた」(21)ことを意味するのであろう。さらに、「真木柱」巻に語られる鬚黒の家庭騒動に関連して、鬚黒の前妻はなぜ紫の上の姉でなければならぬのか。これは大朝雄二氏が言われる通り(22)、玉鬘の結婚が「紫の上の底意から出たものと曲解して呪詛する継母の存在は、紫の上の立場の脆弱さを改めて印象づけるもの」なのだから、継子である紫の上の身の上も浮き彫りにされたことになる。

以上のように、源氏物語における紫の上の妻としての座の揺れ動いた状況をみてきたが、一体妻の座は如何なるものであろうか。林田孝和氏が指摘されるように(23)、「正妻は、男の身分に相応する家の姫君が選ばれ」、もしその男の社会的身分がさらに高くなれば、「正妻もそれ相応の女性に換えるべきだ」という習俗が根強かったようである。女三宮の婿選びにあって、朱雀院が中納言である夕霧にその内意をほのめかしたとき、夕霧は、

さやうの筋にやとは思ひ寄れど、ふと心得顔にも何かはい

らへきこさせむ。ただ、「はかばかしくもはべらぬ身には、寄るべもさぶらひがたくのみなむ」(若菜上一八)

と、「私のような頼りにもならぬ者には、妻になってくれる人もなかなかない」と答えている。夕霧はこの四月に長年の思いが叶って雲井の雁と結婚したばかりであり、そして同じ年の秋に中納言に昇進されたのである。すでに結婚したにもかかわらず、「妻になってくれる人がいない」と答える夕霧の気持ちには、すでに指摘されているように(24)、官位の上昇と共に身分の高い姫君を新たに正妻として迎えたものが潜んでいるからであろう。光源氏も準太上天皇となったから、紫の上は身分上妻としてふさわしくないと想着、高貴な内親王女三宮を正妻として迎えたのであろう。

源氏物語の流れに沿ってみれば、紫の上は光源氏に引き取られてから明石の君が現れるまで、光源氏の「上」へ「なりのほれ」たことが分る。しかし、己れの身のほどを回想してくるような紫の上の境遇は、一貫して物語の中で語り続けられている。明石の君との場合は、姫君を引き取ることで、二人の優劣関係がはっきりされたかのように見えるが、しかし、朝顔の姫君の再登場によって紫の上の妻としての座が再び揺るがされることになる。「藤裏葉」巻で、明石の姫君の入内に付き添った紫の上が、女御に準ずる待遇を受けるはええしさが語られた直後に、急転して女三宮の降嫁が決定されるのだから、紫の上には一生を通して動揺の中を生きていかざるを得ない苛酷な運命が

課せられていたと言えよう。

「梅枝」巻まで「春の上」「南の上」「殿の上」などと紫の上が正妻扱いのような呼び方をされたことは、工藤重矩氏が指摘された通り(25)、物語の「構成上の矛盾」であり、「元来紫の上は嫡妻として結婚したのではなかった」のである。もし女三の宮降嫁という物語の構想がなかったならば、紫の上はいつの間にか六条院正妻の座におさまったことも、露わにならずに終わったであろう。しかし紫の上は根本的には六条院の女主人となりうる存在ではない。光源氏自身紫の上と女三の宮の立場の違いを、女三の宮が柏木との密通を起こした時の思いとして次のように認識している。

かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、うちうちの心ざし引くかたよりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかるとはさらになぐひあらじ、と、爪弾きせられたまふ。(若菜下二三四)

柏木との密通を知った光源氏は、「うちうちの心ざし引く」紫の上よりも大切にしていた女三の宮に裏切られてしまったことに爪弾きしたい気持であるという。工藤重矩氏が言われたように(26)、紫の上は「愛情ではまさっていても」、妻とする場合はやはり「その関係は内々である」ものとしか認められない。女三の宮降嫁後の紫の上と宮との立場の違いは、この「源氏の認識においても当然紛れる余地のないものだった」と言うべきであろう。

六条院の女樂が終わった後、紫の上は発病し、その様態が一進一退を繰り返している、二条院へ移すことになった。紫の上の二条院移転が、思いがけない女三の宮と柏木の密通という悲劇を胚胎しているというのは、今日の一般的な認識となっているが、しかし紫の上が人生の終わろうとしている大事な時に、再び二条院に戻されること自体のもつ意味も決して見逃してはならない。女三の宮の降嫁によって、否応なしに紫の上は華やかな六条院の舞台から退場し、孤児同然の境遇の時代に引き取られた二条院に戻されたということは、すなわち彼女の本来あるべき立場に還元させられたことになる。二条院こそ紫の上の唯一帰るべき場所であって、二条院に帰ることによって、女三の宮に対して、紫の上の立場は無残にも没落し、三十年近い彼女の妻の座は、実は空虚なものであったことを厳しくも思い知らされたことになる。

このように、紫の上、女三の宮、明石の君の三人の六条院における比重の大きさはこれまでとは違って、地位的には紫の上より女三の宮が絶対的な優勢にあり、実質的には明石の君が紫の上存在を凌ぐ立場を獲得しつつあるのである。言い換えれば、紫の上の妻としての座は外面からは女三の宮、内面からは明石の君によって揺るがせられ、六条院の栄華の世界から自ら身を引く立場においやられたことになる。繰り返し述べてきたことだが、紫の上は孤児同然の境遇で二条院に引き取られ、正妻妾の上の逝去の後、光源氏との新枕があり、彼女はあたかも光源

氏の正妻の位置を獲得したかのように見えていた。しかし、それは彼女の一时的な幸福でしかすぎないということが、女三の宮降嫁を通して明らかになったはずである。女三の宮の登場は、当初から一貫して紫の上は藤壺の「御かはり」にすぎなかったことを示している。光源氏にとって、紫の上はあくまでも「ゆかり」としての「うちうち」の存在であるにすぎなかった。高貴な女性が出現すると、その方に関心を寄せるなど、光源氏にとって紫の上は決して永遠の妻ではなかったのだと言えよう。

注

(1) 『源氏物語』からの引用は、新潮日本古典集成により、巻名と頁数を示したが、巻名が明らかない場合はこれを省略した。なお、傍線・傍注等は私による。

(2) 森一郎氏「女三の宮降嫁の事件」(『源氏物語の方法』桜楓社 昭和44・6 所収)。

(3) 注(2)に同じ。

(4) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」第六卷(角川書店 昭和41・6)。

(5) 大朝雄二氏「女三の宮の降嫁」(『講座源氏物語の世界』第六集 有斐閣 昭和56・12 所収)。

(6) 源氏物語古注集成13巻『岷江入楚』卷三(桜楓社)、三五六頁からの引用。

(7) 森岡常夫氏「紫上の立場―女三宮の降嫁に対して―」

- (「古典研究」ノートルダム清心女子大学 第八号 昭和56・3)。
- (8) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」第七卷(角川書店 昭和44・8)。
- (9) 森一郎氏「六条院の変容―若菜上・若菜下」(『国文学』第32卷13号 学燈社 昭和62・11)。
- (10) 新潮日本古典集成、二〇頁からの引用。
- (11) 後藤祥子氏「若菜」以降の紫の上」(『源氏物語の史的空間』東京大学出版会 昭和61・2 所収)。
- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 熊谷義隆氏「明石君と季節―『冬の御方』考―」(『山形女子短期大学紀要』昭和58・3)。
- (14) 倉田実氏「蘇生の感懐」(『紫の上造型論』新泉社 昭和63・6 所収)。
- (15) 注(9)に同じ。
- (16) 注(11)に同じ。
- (17) 注(11)に同じ。
- (18) 小町谷照彦氏「紫の上の憂愁と発病―紫の上論(4)―」(『講座源氏物語の世界』第六集 有斐閣 昭和56・12 所収)。
- (19) 秋山虔氏「紫の上の変貌」(『源氏物語の世界』東京大学出版会 昭和39・12 所収)。
- (20) 後藤祥子氏「愛執の構図―紫の上の嫉妬―」(『国文学』

第16卷7号 学燈社 昭和46・6)。

(21) 注(5)に同じ。

(22) 注(5)に同じ。

(23) 林田孝和氏「源氏物語第二部の主題―紫上の妻の座の視角から―」(『野州国文学』国学院大学栃木短期大学 3132合併号 昭和58・3)。

(24) 注(23)に同じ。

(25) 工藤重矩氏「若菜巻以降の紫上の妻としての立場」(今井源衛編『源氏物語とその周縁』和泉書院 平成元・6 所収)。

(26) 注(25)に同じ。

(二)・しゅうびん 本学大学院博士後期課程)

正  
前号(十二号)に掲載致しました、島田とよこ氏「忠平の禁色聴許―蘇芳(下)襲を通して―」の中に次のような誤りがありましたので、ここで御詫し訂正致します。

30頁下段 8行目

訂 誤 正

「@」――→「缺」